

は必要になります。とにかく、きめ細かく見ていくことです。

夏目漱石と森の都

荒木 熊本市のことを森の都といいますが、伝承的には、明治二十九年、夏目漱石が京町の新坂を降りてくる時に言ったといわれています。このことを考えますと、明治十年の西南の役でほとんど丸焼けになった熊本市が、およそ二十年で森の都になっているわけです。今度の場合、熊本大空襲でほとんど廃墟になりましたけれども、もうすでに二十七年もたっている。明治と比べれば、熊本市はもっと緑の町になってよかったです。そうなりきれなかった。ま、熊本城というひとつの大きな中心があって、そこに大きな楠木などが繁っているから、森の都という感じがしないではないんですが、町そのものを見るときは、やはりどうも森の都とは言えない。

樹木の間に見える店

それから、以前は道路も土の道路であって、そこに街路樹といいますが、水道町、下通り、船場あたりにしましても、青桐などがよく植わってありましたね。現在も新町の古い町の方に行きますと、榎の大木の並木がずっとあります。電線などもあまり張りめぐらしてない。民家そのものもいまのように石の建物じゃなくて、むしろ樹木と調和する形で、高さ



▲ 榎や青桐の古い並木が残る熊本市の新町界隈

も二階建てのものであった。家の影になるという点でも、柿の木などかなり大きなものを入れておいた。昔の人は、樹木の中にある家、樹木の間に見える店というふうなものの中に、一種の風格というものを自ら感じておったと思うんです。

戦後は、都市の構造が変わってきたこともあると思うんですが、商業主義的な遅しから、少しでも自分の看板が見えるように、店先が広く見えるようになっていくことで、街路樹的なものはなくなる。植えても間かくを広くする。あるいは繁ったものを枝をおろす。木は大木にならない。そういうふうには熊本の人の生活が変わってきて、樹木を大事

にする、樹木を生活や商売にとり入れるというふうな風雅な気持が、ほとんど消えてしまったのではないかと。結局、そういうことが戦後二十七年もたつて何か中途半端のまま、こんにちまでできてしまった原因ではないかという気がします。

ま、いずれにしても、緑とか森というのが、空気の浄化あるいは人間生活の情操の面からも必要なわけです。従って、県道とか国道などが相当広くつくられてはいますが、そういう道路を生かして、街路樹を計画的に植えていく。そして、熊本の中心部をひとつの風格ある町にしていくことが大事じゃないかと思うんです。例えば、肥後銀行本店の前、例の山崎町から新市街までのあの

大通りですね。道のまんに街路樹がある。そして、車は左右を整然と動く。あれなんかは非常にいいと思いますね。

かわいそうな街路樹

今江 町の中に木があるということ、皆んな必要だと考えていないんじゃないでしょうか。とくに、道をつくるときは、木はほんのつけたしみみたいなもので、あってもなくていいもんだという感じが強いんじゃないか。といいますが、銀座通りには柳が植えてありますけれども、木の根元まで全部アスファルトで固めてあるわけです。これは相手が植物ですから、下から水を吸って根で呼吸しなけりゃいけない。理屈じゃ簡単にわかるんですが、現実にするときには、これをポーツと埋めてしまおう。ということは、ちょっと強い風がきたらポツとひっくり返るような、棒くいと同じようなものになってしまっています。

それから、昨年、南熊本駅前から三号線の南署のところへ出る道が通りましたけれども、あの道はきれいに歩車道の区分がついているのに、木を植える余地が全然ない。歩道までが全部固めてある。歩道に木があるから、熊本の暑い夏の日射しもそうなくて行けるのに。熊本ではよく、男の人まで日ガサをさして歩きますけれども、ああいうところに木が育てば、日陰を歩くことができるようになるわけです。

それから、帯山中学校のところの道が広くなったのをこのあいだ見ましたけれども、これもやっぱり木を植えるということとなしに、道が全部アスファルトで固めてある。歩道もそうです。ですから、道をつくるときに、道路を設計なさる方の頭の中では、並木の必要というものがだんだん薄くなってきている、ということではないかと思うんです。最初から木を植える意志なしという道があつちこちに出てきている。大津のバイパスも全然木を植える余地なしで、ポーツときれいに固まっています。

まちがった教育

黒田 さっきの荒木先生の、川は昔は神聖なものだったのに、それがこの頃は溝のようになったという話。それから、いまの今江先生の木を植えられない、木をコンクリートで固めるといふ話。みんなわれわれの外国流の工学のいけないところだと思ふ。私は工学部の出身ですけ



黒田・外国流のいけないところが

れども、大学でそういう教育を受けたんですよ。都市の下水は、一応浄化すれば海や川に流していいんだと。道路はとにかく丈夫で、自動車を通ればよかった。そういうふうな習性がある。それが一方では、工場の有毒な物質をたれ流してもいいというところにつながっている。そういう教育でいままですときている。それが間違つたというところは、この頃みんな気付いたわけです。日本人というのは聡明な民族だと思ひますのでね。これからはよくなるんじゃないかと思ひますね

それから、いまの木を切る話ね。大学の中でやるんですよ。施設担当の技術屋がね。私はやかましく言ってるんですがね。それから、木は水だけじゃなくて、地中からの酸素もいるわけですね。ヨーロッパあたりの街を歩いてみると、ツリーサークルというか、街路樹の周囲に大きなサナをやっていますね。日本でも売出しているらしいけども、あれを使うと、い言われるような恐れはないです。

捨てていい時、悪い時

今江 昔のままの土の道なら、まわりを何ほ踏みかためても街路樹みたいな強い木ですと、大した被害なしに伸びるものなんです。それを、砂利を流すのと同じような感覚でアスファルトをパッと張ってしまつて

捨てたのがひどいのに腐っていた。それと同じ感覚でたくさん捨てる。おまけに腐らないものが多い。僕なんか行儀が悪いもんですから、山に採集なんかに行くと、例えばバナナなんか食べながら行きますが、人のあんまり通らない山の中とかヤブの中にボンボン捨てて行きます。すると行儀のいいのが、行儀が悪いとい

汚染の原因を追跡調査

球磨川と自然を守る市民の会 (人吉市)

清流といで湯が看板の人吉市でいま静かに深く自然保護のための住民運動が進められている。

四十五年九月に発足した「球磨川と自然を守る市民の会」運動がそれだ。現在会員は千二百人。商店、旅館主、教諭、サラリーマンなどの個人会員から商工会議所、ライオンズクラブ、労働組合などの団体まで会員構成は幅広い。

会が生まれた動機は、ここ四、五年来目立ってきた球磨川の汚染だ。河童達にとって唯一の水泳場であった清流も四十四年頃から眼疾や腹痛を訴える学童が続出してついには水泳禁止となった。水質検査の結果大腸菌がウヨウヨしていることが判明したからだ。川底の魚が手に取るように見えた頃の球磨川が今さらに懐しいと会員の一人は嘆

かけがえのない球磨川をこれ以上汚

って怒りますけれども、一人、二人がヤブの中にバナナの皮を捨てるのは、何の害もないわけです。腐っちゃうもんですから。

ところが、大観峯とか阿蘇山上のように多勢集まる場所で、罐詰の空罐とかポリ袋などを捨てるので、どうにも始末が悪い。結局、道路の並木のこと、川

しては祖先に対して申し訳ない、と会では早速汚濁の追跡調査に乗り出した。専門的な水質検査は、市を通して県の衛生研究所に依頼したりした。汚濁の原因はいろいろあった。スプロール化した都市家庭の排水、上流の砂利採取場の排水、家畜農家のたれ流しなど。対策の方法として会では市と議会に働きかけて公害対策を積極的に進めることを要請、その結果、昨年議会に公害特別委員会が設置された。これからは本番だ。

「公害対策は巨大な行政力と施策が必要だということを痛感している。」しかしそれにもまして大切なことは公害についての市民の関心と協力です」と実行委員会のメンバー達は力説する。市民総参加が真に実を結ぶことによつて「清流の街人吉」はかろうじて守られて行くのかも知れない。会長は上妻進氏。